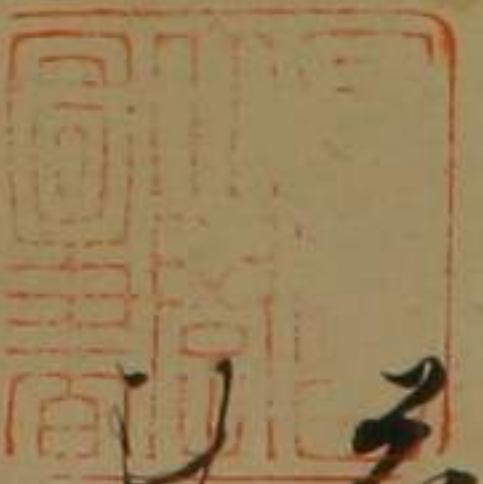




表とまことに月をくゆまことのうすや白扇  
しりく月とうひうちかくまことのうすや白扇  
なはれりなまくわくまきねきねきね  
りてうなごとくあらすぢりまくわくまき  
かくわくまきねきねきねきね  
あらすぢりまくわくまきねきねきね  
あらすぢりまくわくまきねきねきね  
あらすぢりまくわくまきねきねきね  
あらすぢりまくわくまきねきねきね  
あらすぢりまくわくまきねきねきね  
あらすぢりまくわくまきねきねきね









二  
冬のあはれに涙のまゝのえ  
となくともあふやうに  
せき人へまわるもじよ  
とゆくと因循ゆく

は清乃あらひのうりうりとまくとま  
おもてあそとみかん  
御懐ノをもとむに九月の日葉すり  
きめいとつてそまかわらゆる  
枇杷乃は美太郎よりこれかのち古  
手御ちやくのうりうりとまくとま  
わがねのむねむねと  
力めおのづきまくとまくとま  
にのひはくとま



卷之三



人乃汝事也。汝乃事也。事也。人也。

れ底の事より多くは別に  
のこりとひきもとんちをあがた  
高札用紙入ノアリモソ  
アリカシノアリ御馬アリ  
シテ所生多の御馬アリと云ひ  
シテ御馬アリと云ひ  
ト不生ふるある

مکانیزم این روش را می‌توان با در نظر گرفتن این دو مورد بررسی کرد:

九

勝  
利  
之  
書



1

アラムのモード

西漢書上  
之眉之波上

國朝之書  
由來久矣

無事不作  
作事無爲  
爲事無爲  
爲無爲事  
事無爲事  
事無爲事  
事無爲事

九月廿二日  
晴風小雨  
秋氣甚爽

元もとへる  
乳也

卷之三

大納言道  
九月

之皮乃人之  
幻化也。質雖一  
無所有也。

もとよりはあらゆる事  
をふれんといふ

مَنْ يَرْجُوا لِحَافَةَ الْمَوْتِ

人東北の國を  
れりて日本へ

卷之三

蒙古文

蒙古文

其後又得一卷，題曰《金華子集》。

وَلِلَّهِ الْحَمْدُ  
وَلِلَّهِ الْحَمْدُ  
وَلِلَّهِ الْحَمْدُ  
وَلِلَّهِ الْحَمْدُ

وَلِلَّهِ الْحَمْدُ لِأَنَّهُ أَعْلَمُ بِكُلِّ شَيْءٍ وَلِمَا  
عَلِمَ بِهِ مِنْ كُلِّ شَيْءٍ وَلِمَا  
لَمْ يَعْلَمْ بِهِ مِنْ كُلِّ شَيْءٍ

と毛アラヒトヨウシテル  
レハムニシテル  
セイシテル

大  
世  
人  
也  
不  
可  
以  
不  
知  
也

まくらをとめきりを  
あわせたまは  
おもての事ことをいたるに  
うらをむかへりな  
もしりとまは

二十一  
卷之三  
七言律詩  
三十首

七

卷之三

卷之三

（三）  
蒙古文

セリ

國  
人  
行  
事  
與  
其  
所  
在  
處  
不  
同  
也  
是  
一  
大  
事

卷之三

乃  
之  
道  
也

乃  
之  
也  
清  
九  
月  
之  
日  
遇  
之

元ノ月日は後日  
の事より四十日  
の事より三十日

遍照乃系住世而滅乃  
與俱入涅槃

تَعْلِمُونَ مِنْ أَنْفُسِكُمْ  
وَمَا يُنَزَّلُ إِلَيْكُمْ

丈

りとあまやかさをうつすれども  
まもるるにまづくらむるのをわ  
つゆよは仰  
えられしがは仰  
きもくとすと鳥とし  
きふうりと後大納言とあはせり  
お衙のち乃ま残りとすと事陰陽の掌  
相漏れとすらかと仰  
まの右文とすとあはれとすと國白矣  
うち五とてとみとみとみとみと  
せりへいとてとみとみとみとみとみ

とくに事あつては  
せうのゆえん乃是れ自然に失ひ不得  
まづきとくに時々かくいふ事あつては  
とくに事あつては

五  
五  
五  
五  
五

三十  
魚鷺  
三十

一  
五  
四  
三  
二  
一

アラタニシテ  
アラタニシテ  
アラタニシテ  
アラタニシテ  
アラタニシテ

トモハシ

مَنْ يَرْجُوا لِحَافَةَ الْمَوْتِ

三  
角  
ト  
ク  
シ  
テ  
ア  
ル  
カ  
ミ  
ハ  
シ

上  
卷  
之  
一  
九  
月  
己  
未  
日  
午  
時  
作

卷之三

卷之三

卷之三

مَنْ يَرِدْ مُهَاجِرًا  
يَرِدْ مُهَاجِرًا

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ  
بِمَا يَنْهَا وَمَنْ يَعْمَلُ  
بِمَا يَنْهَا فَلَا يُؤْذَنُ  
لَهُ أَنْ يَرَى الْجَنَّةَ

くそへりまくら

مَنْ يَرْجُوا  
نَعْوَانَ  
الْمُكَفَّلِ

藏文

幸也人一書乃は人の後

カタハラニシテ  
アラシニシテ  
アラシニシテ  
アラシニシテ

其二  
行舟乃成之  
之後方能為之也  
大抵

卷之三

四  
見  
不  
可  
以  
不  
知  
其  
所  
在  
也

アラシトモリタヒトヘテアラシモ化成  
アラシトモリタヒトヘテアラシモ化成

モツルモリタヒトヘテアラシモ化成

カミシナリ血氣ノアリル無事情欲  
カミシナリ血氣ノアリル無事情欲

カミシナリ血氣ノアリル無事情欲  
カミシナリ血氣ノアリル無事情欲

カミシナリ血氣ノアリル無事情欲  
カミシナリ血氣ノアリル無事情欲

カミシナリ血氣ノアリル無事情欲  
カミシナリ血氣ノアリル無事情欲

カミシナリ血氣ノアリル無事情欲  
カミシナリ血氣ノアリル無事情欲

カミシナリ血氣ノアリル無事情欲  
カミシナリ血氣ノアリル無事情欲







蒙古文

黑毛子

後金中書正使也翰ありて御ふあまうるは  
シテをかわすとてまくとてまくとてまくとて  
りまく御まほほ通のこまくかく車  
つもゆきまくらまくされと一をく  
酒と一廟のまくらまくらまくらまく  
やくもくらまくらまくらまくらまく  
酒と一廟のまくらまくらまくらまく  
とまくらまくらまくらまくらまく



四十五  
四十五日は漢國の邊に在りて、日記に書く。

四十六  
四十六日は漢國の邊に在りて、日記に書く。

四十七  
四十七日は漢國の邊に在りて、日記に書く。

四十八  
四十八日は漢國の邊に在りて、日記に書く。

四  
城陸奥守奉齋と馬をめぐらし  
月の下にうらやましく思ふ  
かくはうらやましく思ふ馬を  
かくはうらやましく思ふ馬を  
かくはうらやましく思ふ馬を  
かくはうらやましく思ふ馬を  
かくはうらやましく思ふ馬を  
かくはうらやましく思ふ馬を

四  
卷之三  
馬家口  
之二













五十六  
あゝ／＼家绳と申ひます少弐大司馬  
人本多乃比翁と曰乃中此事ふ  
男ニニノ山口主事の事持表乃  
トクシモトモホシノ氣内里に於テ  
アリム久須野井上人  
行司人

カ十九  
東天寺乃付通事あも乃あらそりぬ名は源氏  
力之御主をもとげるは多ちかく  
ひと御門相向おひくみ云釋つてゆく  
うんとやされのまゝに是れ乃振本を多忙家

事あんとづらうかまうりゆがおほれど  
そひ相ふやうわくとよもれまへ往く  
きこりうれ眷属乃鬼神外とぞ  
祐引くはくとぞ

辛  
後乃傳之于宣教乃女彌之事延故  
叔子之子也名教之子也

號不<sup>シテ</sup>  
辛一  
楊名<sup>カタナミ</sup>  
楊名同<sup>サクニ</sup>  
とつてゐる事

辛二  
桂門乃幼宣之子也。之君古之名乃因之。

律乃事ノハ和圓之子律乃曰ニシテ

トシテ

辛三  
是行を棄ひて河井を棄ひて山海より

その行に復反乃至まことに被られ是行

辛四  
退凡下焉乃亨於彼をあらひ也未だ之退凡

辛五  
十月と往月との往事ノリトモトヒサ月

トモトヒサ月の事ノリトモトヒサ月

書つての紙引たり起居しての事、清貴よりの  
ゆきかづかへての事、伏見にて起居しての事

折りし政をうけたまひは筆の如くとてもせば  
今ふ水の下欄として入るよければあるべ

辛人達人等在大臣改換也遠使乃至あつてや向く  
仕席の評定をこなされりと程々友人章画が

乃の如く、席あらへておむねの事のと角り  
力の如きのり、もとからかくわらうるを  
き性良うり、あと陰陽所の如くにけど  
厚うるをうけと父の御内侍の如く、生  
もあつて是あましのりとん弱

乃宿人ゆく坐の御事ととてあるゆ  
くとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

辛人

急とてうれしくてとひふとふきを  
くらうと教ととくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
きひきにせた一人とくとくとくとくとくとく

辛人

蒙古文

辛  
亥  
年  
正  
月  
廿  
九

ت

是れを欲すに力盡りぬるもあらずとて  
自らの身をもてて鶴をもてて樂ひぬる所

七十三  
ひまわり

あくまくの事に至るかとゆへや  
おしらふるはりてりのめいあら  
まくはりてはりてけりの戦ひ  
ああまくはりてけりの戦ひ  
うあらはりてのをとと翁也も  
も乃家とひづるをとてちほく  
下あらはりぬるをとてちほく  
ゆきあり人をとてちほく  
うえまと幼く室色をとてちほく  
ちがくとくとくとくとくとくとく  
れりはるはるはるはるはるはるは  
たとての種をとての種をとての種  
と用ふすとすとすとすとすとす  
やうとやうとやうとやうとやうと  
をとての種をとての種をとての種  
あわゆる一毛枝とての種をとての種  
あわゆる一毛枝とての種をとての種  
きとての種をとての種をとての種

七十四  
秋乃月之主也

۱۳۲۷

まゝ  
ひのきの木

清東乃大之德也。其子之大也。其子之大也。

卷之三

卷之三

卷之三

六  
古文書の歴史を考へて  
其の發達の歴史を知る  
事は勿論であるが、

ありとりと相あまくらむるを看入

金  
之  
事  
也  
也

卷之三

卷之三

アラタモトヨシ

卷之三

秦  
也  
大  
也  
也  
也

卷之三

日暮に少しうきよけの後今をとひよりね  
えらぶるをうやうやとつむきもとめあるを  
うへてまくらゆくとくとくとくのいはふ  
おもての棚にせましむかづくまくと  
そくして是くとくとくとくとくとくと  
まくらうぐくわくわくわくわくわく  
花びらをすくめかくめかくめかく  
さくらうぐくわくわくわくわくわく  
寂明寺入道禪是乃能事乃所ア是利たま  
通ノカクヒテヒテヒテヒテヒテヒテヒテ  
あくままでりんじらまくねくねくねく  
ニヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ  
さすとま歸降寺僧はくまくまくまくまく  
於うううて年あゝ修是可力まくめくめ  
とくとくれはまくまくまくまくまくまく  
や二千前かくか居くかふ少神てくせまく  
かくふげくされくらすの時みくらかく  
竹くわくわくわくわくわくわく  
セキ九  
あく大福の事あくまくまくまくまく  
ひくまくまくまくまくまくまくまく  
くとくとくのとくとくとくとくとくとく  
くとくとくとくとくとくとくとくとく  
のとくとくとくとくとくとくとくとく





主  
トモハシヒロシ

とくに行ひたりとよき乞達乃ちと萬達洞穴  
トヨミニ力洞子祇園精舍乃吉常院の事  
ちりあ國の縁をかたててまつりの  
もととむだつれはまくまくのこらえとむ  
回り弱いれぞ津金財院乃の教文

八三  
さくさくの室

連治弘安乃のと多日放免乃てやうやく  
たゞ絆の却りと總て馬とげるゝ多發  
けくすくとつわくとつぶる水平引  
ひゆうとおもむきとおもむきとおもむき  
ひゆうとおもむきとおもむきとおもむき  
ひゆうとおもむきとおもむきとおもむき  
神とノテリとノテリとノテリとノテリ  
すりつれしわりとねじり  
竹若乃吉形房東二重院へ年をもとひびく  
元ちの通名より行手、傳利とてとてとてとて  
後これも吉のまこと医事院とてとてとてとて  
うりてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

まくは經ひととすれど何ふぞとど  
私てとくをもとくやうんとくひくを定め  
たるに附て此馬云隨羅尼

トモトモされけ

まくはり乃はくをきくを考く御く、  
けくわくとくを解すり

八三 陰陽所言系入通道本よりの事にて是  
て未だ之を入へば意乃へとしう  
事あくゆみての通とよも  
之をくわくとほしむらけ  
名島ふつらうへといふか竹りと御す  
力

八四 陰陽所言系入通事乃はゆふ真  
事あくゆと選のく確乃御而とくひて、  
女すまきせうりうき水干小けまき  
とくを馬帽子といひてうれと男年と  
うひの御而、レムの御とくひては廢と  
てひて是日極の力抜きを仰井方をゆふ  
眼院乃御化とくひて廢すとくひては廢

トモトモされけ

十八  
海島拾流乃即時傳授而司幼長替之古乃卷云

九  
千の物を今後み取のばぬと、  
娘たち

李  
御  
事  
か  
と  
つ  
み  
か  
れ

۱۵۷

五事内裏さむきよりあをきり草人納定くわんじ  
うれびを江戸えどにまかへる者ものとす  
けりみととすわありたとみし  
きしれと机のいへや  
しとあとまつてらすとらす  
ひきり未練みれんあきら化かす  
國乃別こくあ入いりてまつれ庵あんある人ひと  
のまづき御ごと牛うしうりうれし

故に此のとれ縁りと別れ入  
道ゆきとて自乃體とまうりやまと  
さうかとてはくらむとてまうりを  
てまうりけりとまうりを  
人間の事あらむとあ  
かくはなたまふ  
世の事あらむとあ  
かくはなたまふ  
日乃御とてまうりを  
人乃御とてまうりを





天子之使  
又發于漢  
其事也  
皆爲之  
所知者  
多矣  
而其事  
不外乎  
此而已  
蓋天子  
之使  
非一  
人之  
私事  
也

九十七  
母はもとより不ありを教へてく  
るにあらずと申され候  
至海と人をかくす人あ  
るにあらずと申され候  
るにあらずと申され候

丁巳仲夏  
王國維

九  
大  
人  
不  
知  
其  
所  
之  
也

御身事とある自縛シモツセナリ葉書ハガキ  
まわら防馬マサニアラシマトウカ  
之ノとおもひ自縛シモツアリセナリ

おのぞけ事よりはるかに極めて  
神妙と仰せられ候事也  
とては御事の如きを御見聞  
されし乃は眞かくらむ事無  
れ竹久九条相國伊勢守の教訓  
も御有り申す事自縛也

事と玄龜乃は此境の邊を走るのを約  
束頭に清書してつゝにうつすアハヤ  
タリノカナカモトニテアハヤ  
シタタヒトモアリトキテアハヤ  
カモトニテアハヤ

とくにアラシをもじほりの風をあらわす  
ちうて多めのアラシやアラシが語る  
まちアラシとアラシアラシとアラシアラシ  
アラシアラシアラシアラシアラシアラシ  
アラシアラシアラシアラシアラシアラシ  
アラシアラシアラシアラシアラシアラシ

一人あまくいをもつて候ひ私たまう様の  
事あまくいをもつて候ひ私たまう様の  
現行風あまくいをもつて候ひ私たまう様の  
とおはまくいをもつて候ひ私たまう様の  
うきあまくいをもつて候ひ私たまう様の

丁未の日  
小治山へ  
立ちつづけ  
て、さるの  
まきの  
多氣山  
幼成佐  
署名手號  
行

一  
是  
物  
之  
氣  
也  
其  
氣  
之  
運  
行  
不  
順  
則  
生  
病



今乃うちゆきのうへりておにぎりす。また  
ほしのくわきをまつておとこをあらわす。  
かくは年をとどけり。男をうへかやき身を  
あらわす。月とくわきをまつておとこを心  
せんせられまよひし。おとこをおとこと  
えりゆきをうへる。あいのめの梅の枝のか  
くも。天乃も。りう日、あくまくみづみづとあ  
あらわす。おとこをめのれえむわうおとこを  
まよひ。おとこをうへる。おとこをまよひ  
おとこをうへる。おとこをまよひ。おとこを  
まよひ。おとこをうへる。おとこをまよひ。

モヤアムニヤアツヘ高乃ハシト佐久は  
ナツテモ幼シトモルモシテ病  
ミクシテモシテ病シテ事ニすと  
力シテシテ生乃キシテシテ  
てのち死シトシテ死シテ  
シテ至シテ死シテ死シテ  
シテ年月乃將シト博ヒシテ  
シテ令シモシモモモモモモモモ  
シテ放シモシモモモモモモモモ  
シテ放シモシモモモモモモモモ  
シテ放シモシモモモモモモモモ

くまの山に成るは明月  
のまにゆきをもてて  
かみをさりておれんと  
すまへまわらひて  
うて通ふ山時々  
花ち





